

2部

フィールド フィールド
現場から現場へ

現場実習で学んだこと

～心にいつも愛を～

通信教育部社会福祉学科 白幡 浩子

学生 MESSAGE

はじめに

私が東北福祉大学の通信福祉教育部で学ぶきっかけとなったのは、前職から地域の高齢者の方々と携わっていて、ただ漠然と日常生活全般のケアをしていたのですが、自分の援助観や社会福祉観をより深く明確に追求し、「真の担い手」として利用者の方や入居者の方と関わりたいと思ったからです。

入学後の学びは、私に日常の「小さな気づき」を与えてくれました。ソーシャルワークを学ぶと同時に自己の振り返りもでき、それらを通して社会福祉士像が見えてきました。しかしそれはまだ、完成されたものではなく日々変化するものであり、成長するものであると考えています。

私の現場実習での体験が、微力でも皆さんの不安解消のお役に立てばと願っています。

社会福祉現場実習

実習先は特別養護老人ホーム（3週間）と併設のデイサービスセンター（1週間）で受け入れていただきました。この特別養護老人ホームには小学生の時にボランティアとして訪れており、私に「福祉を目指す」という思いを根付かせてくれた、きっかけとなった場所です。そんな思い入れの深い場所で、原点に立ち返りたかったということも実習先として希望した理由の一つでした。

実習の事前準備として行った情報収集は、実習先のある地元とは違う地

域に住んでいるため、インターネットでの検索が中心でした。帰省後には、地元の広報誌や社会福祉協議会の情報誌などを閲覧したり、実際に実習先へ入居されている方のご家族が近所にいたので話を聞いたりしました。他には教科書や参考図書を通して実習先に関係がある事柄についての学習を進めました。満足いくほどの前準備はできませんでしたが、自分とすることができることはすべて行えたと思います。

前準備や実習計画案にしっかり取り組むことで実習の目的や課題が明確になり、それらと生の現場の体験とを照らし合わせることで、心に深く残すことができました。それが充実した実りある実習になっていくことや実習記録をスムーズに書けることにもつながることを実感しました。

また、実習を行う上で指導する方との信頼関係の形成は重要です。「学ばせていただく」という姿勢を保ちながら、苦手意識を持たずにその方の尊敬できるところを探すと、どんどん素晴らしいところが見えてきます。そうすることで、自己の社会福祉士像も明確になり、実習中の学習意欲が湧いてきたので、これから実習を行われる方々にもぜひ実践していただきたいポイントです。

実習の中では、「利用者主体」「役割と連携」「家族や地域との関わり」「権利擁護」「看取り」に着目し学習を進めていきました。これらを通して学んだことやエピソードを挙げていきたいと思います。

「利用者主体」では、認知症の方の不穏時の対応や寄り添いながらもある程度の距離感を保つ難しさや、職員一致の対応をしなければ状況を悪化させてしまうことを体験し、個別対応の難しさを感じました。また、ショートステイの送迎に同行させてもらった際には、送迎車の中で車椅子に乗り、入居者の方の感覚を体験させてもらい、いかに大変な思いをして乗られているかを学ぶことができました。さらには車椅子に厚手のクッションを乗せた場合とそうでない場合では振動の伝わり方がいかに違うかといった実体験もすることなどにより、利用者主体の援助を理解すること

ができました。

「役割と連携」では、各専門職の方に同行して体験することで理解を深めることができました。特に生活相談員の方は、地元をはじめ周辺地域のこと、入居者（利用者）のご家族のこと、関係機関のことなど、情報量が多いことに驚きました。この情報量とコミュニケーション力が、調整役として、また人と人との橋渡し役として必要であることを学びました。

「家族と地域との関わり」では、地元のボランティアグループ協議会、地区の協力会、家族会、個人ボランティア、美容奉仕、防災総合協定（避難訓練）など、実際に話を聞ける方たちから、地域に密着した関わりについて学ぶことができました。

「権利擁護」では、身体拘束廃止、リスクマネージメント対策、感染症予防対策等の、ケアカンファレンスに出席したことや実際のケアの中で、それらの取り組みについて学ぶことができました。

「看取り」については、実習中に重要だと思い、新たな課題として取り入れたものでした。生活相談員、看護主任、介護主任に話を聞き理解を深めましたが、特に生活相談員の幅広い役割や家族との関わりについて学ぶことができました。

また、実習を行ってみて思ったことは、計画通りには進まないということでした。もしも皆さんも実習中にそのような状態になってしまったら、焦らず指導者の方や実習指導の先生に相談することです。そして周りの入居者（利用者）の方や職員の方と信頼関係を築き上げながら、あくまでも入居者（利用者）の方を中心に、課題達成を行うということです。それが未来の社会福祉士の訓練になると思えば、きっとやる気が湧き上がってくると思います。

これから実習を行う人にエールを贈ります。とにかく最後まで諦めずに頑張ってください。辛いときはともに学んでいる学友や支えてくれている人を思い出し、自分を奮い立たせてください。実習後は頑張った分だけ得

るものが大きいと思います。期待して実習に挑んでください。

さいごに

「心にも愛を」をモットーに、気負うことなく自然体で「社会福祉」を追求し、関わるひとりひとりのサポートができるように努力していきたいです。

沢山の助けと支えがあって、社会福祉士の国家試験と卒業まであともう少しのところとなりました。こうして寄稿の機会をくださったことを含め、全てのことに深く感謝しつつ、日々歩んでけたらと思います。本当にありがとうございました。

9月卒業者からのメッセージ

通信教育部で学んで印象に残ったこと

通信教育部福祉心理学科卒業生 五十嵐睦美

4年生の夏のスクーリングで、同じく心理学を学ぶ仲間に出会いました。年齢も職業もプロフィールを全く知らない人と、同じ学問を学んでいるという共通点だけで、何の抵抗もなく急速に親密化が図れることが、とても不思議に思えました。「友人関係の親密化はどのようにして形成されるのか」その時の疑問が私の卒業研究の始まりでした。研究テーマの申込み期日も過ぎていましたが、研究法の講義をしていただいた先生に休憩時間に直談判しました。先生は私の学習意欲を大切にしてくださり、快く通信教育部に交渉してくれました。いわゆる一肌脱いいただきました。この大学には、私たちが学ぶための環境を整え、サポートしてくれる体制が整っています。担当教員の先生はメールのやり取りが連日になっても熱心に指導してくれました。日曜日に訪ねて解析を教えていただいた時も、滞在時間の短い私に合わせ、朝から昼食もとらずに御指導くださいました。このようなサポートがあると断然やる気も湧いてきます！“私に本当にできる？”と思いつつ始めた卒業研究も、このようなかたちで大学在学中一番楽しい学習の場になりました。

私は一年生の時に通信教育部の窓口で卒業論文を提出していた先輩学生を見ました。「担当教員の先生の印鑑はもらいましたか？」「はい」と厚い論文を提出する姿をみて、“すごいなあ論文なんて私には無理だなあ”と思いました。レポートだけでも必死な自分に論文なんて書けるわけがないと思いました。でも、やってみれば、できるんですね！

私も常勤で仕事を持ち、家庭では主婦であり、母です。入学前、大学の説明会の時に、説明の担当者の方が私の娘に「お母さんを応援してやってな」と言ってくださっていたのを懐かしく思い出します。皆さんにも悔いなく楽しい学びを！